

機関番号：12606

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520114

研究課題名（和文） 近代日本の雅楽に関する総合的研究

研究課題名（英文） A Study on *Gagaku* in Modern Japan

研究代表者

塚原 康子 (TSUKAHARA Yasuko)

東京芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：60202181

研究成果の概要（和文）：

本研究は、近代日本において特異な役割を担った雅楽について、①近代の皇室祭祀との関係、②唱歌・儀礼歌など近代歌謡の創出との関わり、③公開演奏会・万国博覧会を通じた雅楽の国内外への発信、④近代の神社祭祀と雅楽の普及、に焦点をあてて解明した。主要な成果は『明治国家と雅楽』（有志舎、2009年）として刊行したほか、重要な史料である楽師日記の一部を『明治四年芝葛鎮日記 翻刻・解題』（科研報告書、2011年）にまとめた。

研究成果の概要（英文）：

This study focused on the unique role of *gagaku* held in modern Japan: (1) relationship between *gagaku* and imperial ancestor worship in the modern era; (2) relationship between *gagaku* and creation of modern songs such as *shōka* (school songs) and *gireika* (ceremonial or ritual songs sung on national holidays); (3) transmission of *gagaku*, domestically and internationally, through public performances and international exhibitions; (4) dissemination of *gagaku* through Shinto shrine worship in the modern era. Major results of this study were published in *The Meiji Government and Gagaku* (Yūshisha, 2009) and in *Shiba Fujitsune's Diary Written in the Fourth Year of Meiji (1871), Reprint and Annotation* (Kaken-hōkokusho, 2011), reprinting and annotating a section of a *gagaku* musician's diary.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成20年度	800,000	240,000	1,040,000
平成21年度	500,000	150,000	650,000
平成22年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：雅楽、近代日本、宮内省式部職楽部、皇室祭祀、神社祭祀、唱歌、儀礼曲

1. 研究開始当初の背景

(1) 雅楽は、日本の伝統音楽の中で最も古い起源をもち、しばしば「千年を越えて伝承される日本の宮廷音楽」などと形容される。

しかし、近年に至って、各時代に楽曲の新作のみならず廃絶曲の再興や楽譜・楽書の編纂、演奏機会と伝承制度の改編等、さまざまな形で音楽伝承を変化させながら存続させてきた雅楽の実態に注目が寄せられ、その検証が必要と考えられるに至った。

(2) 本研究は、その中でも近代天皇制の下で国民国家を成立させた近代が、日本の雅楽に大きな変化をもたらした「特別な時代」であり、現在の雅楽にとって直接の出発点となったことを重視し、研究代表者による年来の個別研究を踏まえ、日本音楽史および隣接領域での近年の研究成果を織り込み、近代日本の雅楽に関する総合的な分析記述をめざした。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、現在「雅楽」と総称されている日本の音楽ジャンルの近代における変化とその影響を総合的に解明し記述することを目的とする。すなわち、幕末維新时期から昭和戦前期までを対象として、「雅楽の近代史」を明らかにするとともに、近代日本において特異な役割をになった「日本近代史の中の雅楽」像を描き出すことをめざすものである。

(2) 同時に、広く東アジア諸国が近代に政治的・文化的変動を経験した中で、前近代から継承した宮廷音楽が今日まで存続したのは日本と朝鮮（韓国）のみであったことを踏まえて、本研究では近代日本の雅楽の事例を解明し提示することによって、比較すべき近代東アジアの宮廷音楽や伝統音楽の研究にも

資することをめざした。

3. 研究の方法

研究代表者自身の研究開始から十数年が経過し、その間に雅楽に関連する新史料の公開や関連する近世史・近代史の研究成果の公開が進んだ。ここから、本研究では(1) 宮内省楽部関係公文書と楽師日記の調査と読解、および聞き取り調査の追加実施、(2) 近世の雅楽との連続・非連続についての調査と再考、(3) 近代日本において雅楽が果たした役割の分析と考察、の三つを柱に研究を進める。

4. 研究成果

本研究の目的に即して、中心的な考察対象とした明治期の雅楽の変化に焦点をあてた研究書『明治国家と雅楽—伝統の近代化／国楽の創成』（有志舎、2009年）を研究期間の二年目に刊行し、その成果を世に問うた。主要な研究成果は以下のとおりである。

(1) 幕末期から明治初期にかけての雅楽伝承制度の変化を、幕末の宮中行事と、明治維新後に創出された皇室祭祀の雅楽および近代特有の新しい奏楽機会と比較して考察し、1870年の雅楽局設置に至る一連の改革が、直接には神楽をはじめとする皇室祭祀に用いる国風歌舞の伝承制度改変と密接に結びついていたことを明らかにした。

(2) 日本の伝統音楽の中で最も早い近代化を成し遂げた雅楽は、1878年パリ万国博覧会への楽器・楽譜・概説書の出品を通して「日本の音楽」として発信され始めた。また、西洋型の宮廷行事での奏楽のため、1874年から西洋音楽を兼修し始めた楽師たちは、保育唱歌や《君が代》をはじめとする儀礼歌・儀式唱

歌などの近代歌謡の創出にも関与した。それらの歌謡では、雅楽に由来する音階（律旋・呂旋）が「日本の音階」として用いられ、その独特の曲調が音楽によるナショナル・アイデンティティの創出に効果を挙げた。

(3) 近代日本の皇室祭祀と神社祭祀には雅楽が用いられたが、学校儀式には儀式内容に応じて雅楽音階ないし西洋音階で作曲された儀式唱歌が使い分けられた。また、陸海軍の軍楽隊が奏でた儀礼曲にも、西洋音階のほかに雅楽音階で作曲された旋律を元に編曲された楽曲が含まれる。雅楽は、近代日本の皇室祭祀・神社祭祀を結びつけただけでなく、雅楽に由来する音階で作られた儀式唱歌・儀礼曲を通じて、それらと学校や軍の儀礼をつなぐ目に見えない紐帯にもなっていた。

(4) 皇室祭祀の雅楽は明治初年から宮内省式部職楽部が担当したが、全国の神社祭祀への雅楽普及は 1883 年に始まる皇典講究所での雅楽教授や、1900 年前後から増加する各地の神職会での雅楽講習会などを通して、昭和戦前期までもちこされる長期的な課題となった。また、20 世紀以後は、台湾や朝鮮などの植民地神社や、教派神道の祭祀への雅楽導入も進んだ。

(5) 明治宮廷の音楽部局としての宮内省式部職楽部は、1884 年に楽道保存賜金が導入され、それと同時に始まった楽生制度（1914 年より七年制の学校方式に改正）により、楽家の子弟を中心とする後継者養成が昭和戦前期までつづいた。しかし、近代日本の宮廷に必要な雅楽と西洋音楽という二つの音楽を兼修したことから、宮廷行事や皇室祭祀での公務としての奏楽と、時代思潮の変化や部外での音楽活動との狭間で、つねに活動バランスの

選択を迫られた。

(6) 本研究で主要な史料の一つとして用いた楽師の日記は、これまでまとまった形で翻刻された例がないため、明治天皇の大嘗祭が行われた 1871 年の芝葛鎮日記（芝は 1870 年の雅楽局設置後に奈良から東上し、1898 年から楽師長、1907 年から 1917 年まで楽長を務めた）を翻刻し、解題を付して科研報告書『明治四年芝葛鎮日記 翻刻・解題』として刊行した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- ①塚原康子「近代日本における音楽（講座—音楽）」、『歴史と地理 642 日本史の研究 232』2011 年 3 月号。34～43 頁。
- ②塚原康子「明治 10 年(1877) S・M・タゴールが日本に寄贈したインド楽器と楽書」、藤井知昭・岩井正浩編『音の万華鏡—音楽学論集』岩田書院、2010 年 6 月、305～326 頁。
- ③塚原康子「近現代日本における雅楽の専門家養成」、ラウンドテーブル 3「近現代における日韓伝統音楽の専門家養成比較—雅楽を中心に—」、『日韓両国の音楽教育の理論と実践—伝統音楽に着目して—』（第 9 回日本音楽教育学会ゼミナール 日韓合同ゼミナール報告書、2008 年 6 月、20～22 頁。

〔学会発表〕（計 3 件）

- ①塚原康子「近代における雅楽の位相」、(財)神道文化会第 12 回公開講演会「雅楽と神道文化」、2010 年 6 月 26 日、國學院大學渋谷校舎、東京都渋谷区

②塚原康子「江戸時代から明治時代にかけて
の日本雅楽—唐楽の位置づけを中心に—」、
第1回漢唐音楽史国際研究会、2009年10
月15日、西安音楽学院、中国・西安市

③塚原康子「20世紀前半における日本の音楽
資料展覧会」、第8回中日音楽比較国際学術
研究会、2009年9月12日、南京師範大学、
中国・南京市

〔図書〕（計2件）

①塚原康子『明治四年芝葛鎮日記 翻刻・解
題』（科研報告書）、2011年3月、94頁

②塚原康子『明治国家と雅楽—伝統の近代化
／国楽の創成』有志舎、2009年12月、243
頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

塚原 康子 (TSUKAHARA Yasuko)

東京芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：60202181